
PLANETARIUM (後編)

真木 葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

PLANETARIUM (後編)

【Nコード】

N1082K

【作者名】

真木 葵

【あらすじ】

PLANETARIUM (前編) の続になります。

(前書き)

P
L
A
N
E
T
A
R
I
U
M

(前編)の続きになります。

一瞬、まるで一瞬だけ時が止まった様な感覚に陥った。言った本人もすんなりでた告白の言葉に思わず我を忘れそうになった。けれど、ホンの2、3秒も経たないウチに昂が負けた。恥ずかしくなって視線を逸らしてしまったのである。

「と、突然ごめん」

慌てて右手で自分の口元を塞いだ。言うつもりだった言葉も言っ
てしまえばその響きに自分自身も驚いてしまった様子だった。青子
はというと未だキョトンとした表情でいた。

「前から青子ちゃんの事が…その…好きになって…ずっと言おう言
おうと思ってただけど、でも一方的に僕が青子ちゃんの事を知っ
てるだけだったから、少しでも僕の事を知ってほしくて今日ここに
誘ったんだ」

無数の流星が群れを成して宇宙を旅する日に。

さすがの青子も昂の照れる仕草にやっと自分が“告白”されてい
る事に気がついたようで、胸中で動揺し始めている。まさかそんな
嘘でしようと、この現実が冗談か何かなのではと必死で会話の糸口
を探すのだが、見当たる気配はなかった。

「あの…迷惑かな…」

「えっ、いえ、そんな」

申し訳無さそうな表情でそう言われてしまったら否定の言葉が咄
嗟に出てしまう。快斗よりも少しだけ背が高くて、快斗より優しそ

うな笑顔で。彼の言葉の端々に青子の事を慕う気持ちがとても良く見え隠れしている。学校に待ち合わせ時間前に正門で待っていてくれたり、星の事を丁寧に教えてくれる姿は、青子といつも喧嘩ばかりの幼馴染みとは全然違う優しさに満ちていた。

何故自分が昴を快斗とばかり比べているのか解らない。自分でも気がついていないうちに、何故か昴の気持ちを考えると浮かんてくるのは快斗だけ。ただの幼馴染みであり、クラスの人気者、女子にも色んな意味で人気のある快斗。…子供の頃からずっと一緒だった快斗。

「もし良かったら、僕と付き合って欲しい」

昴は戸惑いがちに体を強張らせる青子の右手を取って繋いだ。彼の笑みは真剣で、青子と一緒に居る今この時ですら、青子の隣に居られる事を幸せに思ってくれている様だった。

誰も居ない屋上の上で二人きり、まだ時折姿を見せる流星にも目もくれず、二人はただただお互いの視線を交錯させている。

「あ、…それは…」

手を振りほどけずに俯く青子。“付き合う”という単語はまるでまだ授業で教わっていない公式を突きつけられたかの様で、言葉の意味を咀嚼出来ないでいた。突然すぎて、青子の思考回路は大渋滞を起こしている。

やはり自分の思いは迷惑なだけだろうか、昴は自分の気持ちを思えばかりで引き下がれずに居たが、あれだけ明るい彼女がこれ程までに戸惑いの色を見せているのがもどかしかった。全ては自分のせいだと解っているのだが…

「やっぱり、青子ちゃんは黒羽くんの事が好きなの？」

「えっ？快斗ですか…？」

どうして突然そこで快斗の名前が出てくるの？と言った面持ちで青子が聞き出すが、確かにクラスでは幼馴染みという事でからかわれる事はしょっちゅうある。けれど学年の違う昴が知っている程に二人が“幼馴染み以上”じゃないかという噂が出ているのかと思うと、思わず頬が紅潮する。

「仲のいい幼馴染みかなって思ってたけど、青子ちゃんはやっぱり彼の事が好きなのかな」

「それは…」

青子の事を良く見ていた昴だから解る。学年が違って時々しか見れなかった彼女の横顔の隣にいつもあった幼馴染みの姿。羨ましそうに二人を眺めていた。告げられない想いを抱えて。

「違うの…？」

「んっと…」

「もしね、今の青子ちゃんが“好き”で“付き合いたい”人が居ないなら、少しだけでいいから僕の事を意識して見てて欲しい」

「え？」

「今すぐ答えてくれなくていいんだ。青子ちゃんの事を好きだって言う僕が居る事を、解ってほしくて」

本当なら今すぐ彼女の事を独り占めしたかった。明日になれば彼女と自分はまた学年の違う教室に帰るワケだから、しかも彼女と特別仲の良い幼馴染みがいる教室へ。

もしもまだ快斗の事を本気で好きじゃないのなら、僕の事も選択肢に入れて欲しいと昴は名乗り出る。とても、とても優しい笑みで。

「あ、あの…」

「ん？」

自分の気持ちなのに、どうして自分で解らないのだろうか。青子は胸が苦しくなった。好きだなんて言われればそりゃ嬉しいに決まっている。ましてや昴の事は確かにそれ程知らなかったけれど、星の事を話す昴はとても素敵だった。

けれど、自分の胸を支配しているのは何故かいつも自分にいじわるばかりする喧嘩相手の幼馴染みだ。いじわるな態度も、青子との喧嘩も、でもやっぱり青子に優しい快斗。最後の最後はいつも青子の隣に戻ってくる快斗。

「青子は…」

今、この流星群の飛来した夜空の下。
一緒に居たいと望んだのは誰だろう。

快斗の、青子を呼ぶ声が…何だか凄く遠く感じた。

たった数日逢っていないだけで、寂しい想いをするのは快斗だから…？

青子は寂しいの？

快斗が居なくて、つままないの？

「青子は…」

いつの間にか頬が引きつるような感覚に見舞われたと思えば、視界が一瞬でぼやけていった。青子を見ている昴が驚いた様な表情で

戸惑っている。昴を見上げている青子は、必死に何かを堪えたけれど、青子の両目に溜まった宝石は、そっと雫となって頬を伝う。

「青子は…快斗のそばにいたいです」

やっと出た言葉だった。好きなのかなんて解らない。

もうそれ以上は何も言えない、例え快斗が誰かの恋人になってしまったとしても、それでもいい。青子は、いつか快斗が誰かの隣に行ってしまうまでもいい、ずっと側に居たい。

期限付きの幸せでもいい、快斗が幼馴染みでずっと隣に居るのが当たり前だったから、誰か別の人の隣に行くなんて考えられない。それが恋愛の意味での好きなのかどうなのか解らないけれど、確かに望むのは快斗の側に居る事だった。

流星群にかけた願いは、ただ快斗の側に居る事。

普段と何も変わらなくていいから…。

「ごめんね、青子ちゃん。ごめん」

昴はそっと青子の手を離した。涙をぬぐってあげたかった、悲しみを笑顔に変えてあげたい。そっと抱きしめたい気持ちをぐっと堪えた。青子が気持ちを偽らずに、昴に伝えてくれたから。

そっと地面に落ちていく青子の涙は、月の無い夜を飛ぶ流星の様に淡く輝いた。昴は「ごめんね」と何度も謝る。好きだった青子の笑顔を消してしまった事に、何度も謝罪した。

下で待っていた部員達が、昴の携帯をならした。下で帰らずに待っていてくれているらしい。昴は先に帰っててと言って電話を切ると、青子にも帰ろうと優しく告げた。

告白を断ってしまったというのに、青子に変わらず優しい態度で

接してくれる昴に青子はそつと引き寄せられた。なかなかその場から踏み出す事が出来なかった青子の背を押してくれたのだった。

屋上に何も忘れ物がない事を確認すると、扉に鍵をかける。泣き顔の青子の隣で、ゆっくりとした歩調で歩き出した。必死に何か会話がなかったと探しても出てくるのは星の話題だけだった。

そうして夜の校舎の階段を二人は降りて行った。



紅子が何故わざわざ怪盗の逃走ルートの中に姿を現したのか、彼女は自分で「お節介しにきた」と言っていたが、快斗にとっては複雑極まりない思いで一杯だった。

怪盗の変装のまま学校に行くワケにはいかなかったが、近くまで来ると屋上で天体観測部のメンバー含め数人が天体ショーを見に集まって居たのか、機材を片付けて帰る姿が見えたので、旧校舎の屋上で翼を休める。そのまま黒羽快斗に戻って青子の元へと行こうかと思っていたのだが、彼女のすぐ隣に居る少年が目に入り、双眼鏡を手にとって二人の様子を伺っていた。

いつもの快斗のポジションに居る少年が、青子に気があるという事など快斗にはすぐ解った。IQ400の快斗は唇の動きで人の会話が読める読唇術も使えるのだが、そんなもの使わずとも青子に向けたあの笑みは想いを隠す事無く青子だけに向けられている。

そういう事か…。

警察無線の傍受、事前に現場に盗聴器をしかける、怪盗の時は何でもござれだったが、他人の告白シーンを盗み見る事に物凄い罪悪感を憶えた。しかし双眼鏡から視線が外せないのも快斗の弱さだった。邪魔しに向こうへ行く事も出来ず、かと言って双眼鏡を置くことも出来ない。

いつもの青子があんなに戸惑った顔をしているのを見た事があつただろうか。俯き悩んでいる彼女が出す答えがYesなのかNoなのか。ある意味、昴よりも青子よりも緊張しているのは自分かもしれない。

ソイツの元へは行かないで欲しい：そう言えない悔しさが唇を噛む。怪盗として数日学校をサボって、青子からの連絡もろくに取らなかった。メールですら返信しようとすればすでに夜半過ぎになってしまっている自分が、青子の側に居るべきなのか：去るべきなのか。

もしかしたら昴の様な奴の方が、青子の側に居てやった方が青子は幸せなんじゃないか。

何があつた所で自分はこの怪盗を辞めるワケにはいかなかった。それは8年前の真実と組織のベールを明るみにさせてからだ。それまで快斗は“月下の奇術師”で在り続ける。それが快斗が受け入れた運命だった。

青子を巻き添えにしないように考えれば考える程、彼女を蔑ろにしてしまっている。彼女が望んでいるのはこんな自分の隣に居る事ではないのかもしれない。

数億、数千億という世界の宝玉をいとも簡単に盗みだせる怪盗が、一人の少女の笑顔すらこの手に掴めないなんて：皮肉な物だった。快斗が最も望んだ少女は、流星群が：快斗の手の届かない遙か先へと連れ去ってしまうのか。

けれど：昴を見上げた青子の唇が確かに動いた。

“カイトノ ソバニ イタイ”

切実な願いを呟く様に、青子の唇がそう答えた。大粒の涙を溜めて、昂に告げている。双眼鏡を投げ出して今すぐ向こうへ行ってやりたかった。「アホ子が何泣いてんだ」って悪態ついて、頭を小突いてやりたい。青子が望むならどんな手品だって何だって見せてやりたい。

根が明るくていつも笑顔のオンパレードな青子が見せる涙を、早く止めてやりたい。青子が望むならいくらでも側にいてやるから。

二人が屋上を去って行く姿を見送って、怪盗は再び羽を広げた。双眼鏡をしまい、屋上から飛び立った。

怪盗として彼女の笑顔を奪いに行くのではなく、黒羽快斗として青子の隣に帰る為に…。

「もう、この辺で大丈夫です」

青子は昂の前に一步出た。公園の入り口、街灯の下。もうあとのまま真っ直ぐ帰れば家に付く。自宅まできちんと送るよという昂にも見えるように「あそこなので」と自宅を指して丁重に断った。夜道は暗かったが街灯が灯っている。一人で大丈夫ですから、青子はそういった。

「今日は来てくれて本当にありがとう」

「素敵な天体ショーが見れてとても幸せでした」

昂はあえて告白の事には触れようとしなかった。折角泣き止んだ青子に、罪悪感など負わせたくなかったし、やはり自分が好きになった女の子には笑顔で居てほしかったから。

「それじゃ、気をつけてね」

「はい。どうもありがとうございました」

昂は手を振って踵を返した。青子も胸元で小さく昂に手を振った。彼の背を見ていると、言い現せない感情が沸く。謝りたいのか、何なのかよく解らない思い。角を曲がる昂はゆっくりと振り向いて最後にもう一度手を振った。また学校でね…そんな風な笑顔で…。

告白を断ってしまった事。

断った理由。

うやむやな自分の気持ち。

まるで難しい問題が津波の様に青子の頭の中をぐしゃぐしゃにしていくな。昂に対して悪い事をしたのかもしれない、何てそんな思いすら浮かぶ。

けれど気持ちの答えが明確に出ていないからこそ、彼の気持ちに応えるワケにはいかなかった。何よりも青子が側に居たいのは快斗だった。好きだからかどうかなのか聞かれたって解らない。

とにかく…帰ろう…。

早く帰って寝てしまおう。

青子は、まるで足首に鉛がはりついたかのような足取りで踵を返した。

「あーおこ」

え…？

顔をあげた青子の前には誰も居ない。街灯の下に、人影はみあたらない。

しかし今、確かに聞こえた。幼馴染みの声。でも塀の上にも道なりの家の庭にも誰もいない。後ろを振り向いても、誰も歩いていない。幻聴だったのかな…？そう思ったけれど、彼女の右手に見える公園の中から誰かの視線を感じ取った。こんな時間に誰も居る筈なかったけれど、微かにブランコが一つ揺れていた。

「か、快斗？」

月の隠れてしまった夜の下、青子はそっと幼馴染みの名を呼んだ。すると暗闇からそっと現れたのは、やはり青子の勘の通り。黒のロンTとシャーリングの入ったカーゴパンツ姿の快斗だった。

「何処行ってたんだよ、こんな時間まで」

「快斗こそ何処行ってたのよ！学校サボって、いけないんだからね！」

「…何だよ、オレが居なくて寂しかったのか？」

「バカッ…そっ…そんなコトっ…」

そんな事あるワケないじゃない。いつもの調子でそう口が開いたけれど、言葉にならなかった。自分でもどうしてか解らなかったが、

一度緩んでしまった涙腺のせいだろうか。それとも快斗に逢えてホッとしたからだろうか。

再び目に涙が溜まる感覚が襲ってきて、青子は驚いてパーカーの袖で目をこすった。快斗の前で泣くワケにはいけない。今日あった事を、話しちゃいけない…。

しかし快斗はそんな姿の青子に悪態つく様子もない。それどころか一步一步と青子に近寄った。快斗の足音が聞こえて必死になって涙を引っ込めようと努力するのだが、そんな青子の右手を快斗が掴む。

涙目を見られるワケにはいけないと顔を背けようとするが、快斗は青子の顔を覗き込むと右手からボンと可愛らしい音を立てて一輪のバラを出した。手品でよく見せてくれるそのバラには、今日は赤いリボンが結ばれている。

「なあ、ちょっとこっち来いよ」

いつもと変わらない、悪戯好きな子供の様な笑みで快斗は青子の手を取った。こっちこっちと言って連れて行かれるがまま連れてこられたのは、既に明かりも水も止まってしまっている噴水の前。

微かな水音しかない噴水の前に行き、快斗はようやく青子の手を離した。そして両手を広げてマジック開始の常套句。

「レディース&ジェントルメン」

観客は青子だけ。でもマジックの特等席。いつも身一つで様々なマジックを繰り出してくれる青子にとっては大切なマジシャン。何を見せてくれるんだろうと、いつもわくわくして快斗の手品を待ち焦がれる。…この思い、快斗は気付いているだろうか。

「うわぁっ…」

快斗の魔法の合図と共に、噴水が一気に噴出した。何処に仕掛けて置いたのか、噴水の縁に色とりどりの光が灯る。まるで湧き上がった水が光を映し出すスクリーンの様に輝き出した。

それだけに終わらない。目の錯覚なのか現実なのか、流れ出る水の中を光の粒があふれ出す。さっき見た流星群を、TVや望遠鏡ではなく、宇宙の向こうへ飛び出して目の前で見ている様だった。

何処からともなく弧を描いて水面に零れ行く無数の光の粒。溶け込んで消えて行ってしまうその一瞬だけに見せる刹那の光。

「それ、噴水の入れてみるよ」

「え？」

快斗が指差したのは、青子の目の前で出した一輪のバラ。赤いリボンのついたそのバラが、手品の最後の鍵らしい。一体どんな奇跡を見せてくれるのか、青子はこんなに心躍るエンターテイナーを独り占めしている事を世界中の皆に自慢したかった。

青子が一輪のバラをそっと水面に浮かせると、一体何処がスイッチだったのか、もう一度噴水が大きく水しぶきをあげたかと思えば、青子の角度からだけ見えた…水の膜に映し出された天の川。

一瞬の映写機の役目を終えて、水の勢いが弱まったも、光の粒が余韻を飾る。まるで水と光の3Dプラネタリウム。あまりの感動に青子は声も出ない。

「どうだ、オレの新作マジック」

新しく買ってもらったおもちゃを披露する幼い子供のような笑顔でそう言う快斗。成功した事に満足だったのか、青子の感動ぶりに満足だったのか。してやったりと言った感じで青子にピースを向け

ていた。

すごいとかキレイとか感動とか、そんな言葉じゃ言い尽くせない程。こんなに凄いマジックを、一番最初に青子に見せてくれた事が何よりも嬉しかった。青子の幼馴染みはこんなにカッコイイんだと、今日程認識させられた事はない。青子にとって、快斗はただ一人の“好きな人”だった。

「うん…やっぱり快斗はカッコイイね」

「“やっぱり”って何だよ、“やっぱり”って」

それと同時に思い知らされる。こんなにカッコイイ快斗が、こんなに凄いマジック引っさげて皆の人気者になっていく事。クラスの中だけじゃない、いつか快斗はお父さんの様に世界が注目するマジシャンになっていくんだ。快斗はマジックだけじゃなく人を惹きつける魅力を持っている。外見とかっていう話ではなく、その性格が皆から愛される。

快斗は青子の隣にいちやいけない。青子が一人占めを願ってはいけないんだ。

そう思い知らされる。

快斗は、凄いんだ。

魔法の解けない噴水を眺める青子が、徐々にその笑顔を曇らせていく様子を快斗は見逃さない。いつもなら何も考えずに喜んでくれる筈の青子が、快斗の魔法がかからない。いつもの様子ではしゃぐ彼女の笑顔が見れなければ、マジック成功とは言えない。

しかし快斗が短時間で準備できる事と言ったらここまでだった：けれど快斗も気付いている。マジックなんかじゃなくて青子を喜ばせる方法を。何の準備も技術も要らない、青子の笑顔を咲かせる呪文は、快斗自身がよく解っていた。

「青子だけの特別なマジックだからな。感謝しろよ」

突然ぶっきらぼうにそういわれて、青子は「え？」と快斗を見る。疑問符を顔に貼り付けたような顔で見られて快斗も思わず噴出しそうになった。

“青子だけの特別なマジック”

意味が解らず聞き返すが、ふんぞり返っていた青子の隣のマジシヤンは噴出して笑っていた。笑われた事に腹が立つ以前に言葉の意味が良く解らない。

「どうして？皆に見せてあげないの？」

「あげないの」

「何で？」

「何でも」

「どうして？」

「どうしても」

一向に理由を話そうとしない快斗は、ポケットに手を突っ込んだままぶっきらぼうにそう答える。青子の質問もまるで無視している様だった。

「だって、こんな凄いマジック：皆が見たら快斗、大人気間違いなしだよ」

どんな仕掛けをしたのか青子にはさらさら解らない。けれど見た

者は必ず感嘆の声をあげて大喝采間違いなしだと青子は豪語する。
たった一人でこんなマジックを見せてくれる快斗はまるで本当の魔法使い。何だって出来るんだと青子は信じている。

「別に人気者になりたいワケじゃないさ」

「何で？そしたら女の子にモテモテだよ？」

「…モテモテって…」

快斗の気持ちも露知らず、これ大事よ！と言いたげに真剣な表情で言ってくれるから快斗も体の力が抜けてくる。ジト目で睨んでも効果なし。青子は逆にモテモテという言葉に反応しない事に「快斗大丈夫？」と心配しているから言い返す言葉もない。

「いいの。青子はオレの特等席に座ってるから特別に見せてやんの！」

「と、特等席？」

「そう。一個しかないスペシャル・シート」

青子の事だ。ここまで言わなければ特等席の意味も通じないだろう。下手すれば「その席、他には誰が座ってるの？」とでも言い出しかねない。恵子や紅子、白馬の名前すら出しかねない。快斗は素直に率直な言葉で言えない自分を棚にあげて、青子の為に解り易くそう告げた。

しかし、未だキョトンとした顔で自分を見ているから困り物。あーもう…どうすりゃいいだよこの鈍感女！

「その席…」

「ん？」

何を言い出すのかとんでもないIQの快斗にも予測不能。いや、青子のせいではなく快斗にとっては唯一の苦手分野なのかもしれない。何でも理解し何でも瞬く間に思考回路が図式を組み立てる頭でも、安易に解答が閃かないジャンル。

「ずっと座ってていいの？」

屋上で昴に告げた言葉。快斗が旧校舎の屋上から盗み聞きしていた青子の言葉。

ハッキリと感情が言い表せず、それでもハッキリと解る自分の気持。青子は快斗の側に居たい、今まで通りでもいい、期限付きでもいい、幼馴染みのまま隣に居たい。高望みしない青子の希望を、快斗は聞いていた。

「ああ」

「ホントに？」

「本当に」

「ホントのホント？」

「本当の本当の本当」

噴水の仕掛けがタイムリミットを迎える。噴水の縁の明かりだけが静かに灯っている。夜空には星が、公園には快斗の灯した明かりが、そして青子の隣には青子の願いを何でも叶える魔法使い。

少しだけ偉そうに胸を張ってる幼馴染み。出会った頃から変わらない彼の笑顔。青子が流星群に託した願いがこんなに早く叶うなんて…。

「立ったら承知しねえからな」

「うん！」

快斗がそつと青子の右手を取った。何度も繋いだ手が、これ程特別に感じたのは今日が初めてだった。旧校舎の上で見た、青子の側に居る自分じゃない他の男に素直に嫉妬する事が出来なかった快斗だったが、ようやく答えをみつけたようだった。

互いに、互いの側に居る事を望みながら、互いの事を想えば素直に近づけなかった心。喧嘩ばかりの幼い感情にまかせた幼馴染みのままという関係、その生暖かい関係で満足しているウチに、いつの間にか芽生えていた恋。

自覚しない様に蓋をしめていた快斗、暗がりの中でその想いの正体をみつけれなかった青子。

二人の想いは、もう随分前から同じ色の花を咲かせていた。

「えへへ」

「何笑ってんだよ」

「別に」

「変な青子」

今までと同じ距離だったけど、繋いだ指先からお互いの感情が溢れ出す。素っ気無い快斗の言葉も、緊張感のない青子の笑い声も。ようやく二人が得た関係は、今までと何も変わらないかもしれないけれど、確かな想いをお互いに感じ取れる。

青子は快斗の隣、快斗は青子の隣。昔からそうであったように、これからもそうでありたい。

街灯が照らす、朔の夜の帰り道。

二人で通いなれた道を、二人手を繋いで歩く。

時折吹く風も、木々のざわめきも、二人の会話には割って入れない。

種も仕掛けもない快斗の魔法は：

月には内緒、二人だけの秘密の呪文。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1082k/>

PLANETARIUM （後編）

2010年10月21日22時42分発行